

第42回 全国ハイグリーン研修会開催

8月22～23日、ホテル東京ガーデンパレスにおいてエムシー・ファーティコム(株)アミノ・ミネラルグループ主催の全国ハイグリーン研修会が開催された。全国より18社のハイグリーンを取り扱う特約店が参加、報道・当社・メーカー関係者合わせて総勢69名となり大変盛況となった。本会での講演内容を情報提供したい。

「水田土壌の硫黄肥よく度を読み解く」東北大学大学院 農学研究科 准教授 菅野均志氏

植物は硫黄を硫酸イオンで吸収と言われており、体内ではタンパク質の生成に必須な成分である。水稻の硫黄欠乏は分けつ期に発現し、症状は窒素欠乏と間違われやすい。通常は硫黄欠乏の心配はないが、無硫酸根肥料を長期に連用した水田では懸念され、硫酸根を含む肥料の施肥による葉色の回復で硫黄欠乏の判別が可能である。対策では硫酸マグネシウム等の硫酸根を含む肥料を施肥するか、育苗期に硫酸カルシウムの施肥を行うと良いことが分かっている。水田では硫黄は強還元状態になると硫黄は硫化水素が発生し根痛みの一因となることから、なるべく無硫酸根肥料の施肥の指導が常態化されてきた。この影響からか近年では水稻栽培において硫黄欠乏の報告がなされて



いる。硫黄欠乏を見分ける方法として可給態硫黄を分析する方法がある。現在、具体的な硫黄欠乏条件となる目安の数値は分析方法も含めてまだ確立されていないが、土壌を0.1N規定の塩酸抽出法において可給態硫黄を測定した場合、測定値が20 mg/kg以下となると硫黄欠乏の症状が見られる場合が多い。また、土壌中の可給態硫黄を測定しても測定値は欠乏状態ではないが他の要因により隠れた硫黄欠乏が発生する場合もある。可給態硫黄の物質質量に対して陽イオン微量元素の物質合計量が多い場合に硫黄欠乏が発生することが分かった。例えば硫化鉄よりも難溶性の硫化物を形成する可溶性金属が可給態硫黄の物質質量を上回る土壌であった場合、植物が吸収できる硫黄が不足することにより欠乏症状が見られる場合もある。近年の農地において可給態硫黄レベルの実態はどの程度であるか、また農地の可給態硫黄は昔と異なるか、といった点において岩手県内の昭和50年代に採取した土壌と近年採取した土壌と比較調査を行った。その結果、可給態硫黄が20 mg/kg以下で欠乏症状を疑う状況下にある土壌が増えている事が分かった。今後の課題として土壌診断による硫黄肥沃度評価方法の確立と広域評価により土壌中の硫黄含有量の改善が必要な水田や水稻の隠れた硫黄欠乏の洗い出し、硫黄資材施肥法の検討（施肥位置・施肥時期・施肥量・肥料形態）、隠れた硫黄欠乏が原因で窒素肥料が無駄になっていなかったか、硫黄施肥が窒素肥料利用率に影響するのか確認する、水田土壌における硫黄収支（天然供給分・施肥による投入量・水稻吸収による持ち出し量・溶脱量）の確立を今後の課題として研究を行いたい。

「農業法人の経営について」 有限会社山波農場 代表取締役 山波剛氏

当農場は中山間地の新潟県柏崎市水上にて昭和60年、父が40歳の時に脱サラし山波農場を創業した。創業当時は柏崎原産が稼働されたばかりで地元の第2種兼業農家は仕事場に近い市内へ転居する農家が増加、水田管理が難しくなり創業当時から同農場に水田を任せる方が増えていった。演者（山

（次ページへ続く）

(前ページより続く)

波社長)が就農した平成3年からは更に農地が集約する動きが加速化され現在の耕作面積は110haとなっている。日本広しといえど農場より半径2km以内に栽培農地が集約されている地域は北海道を除いてないようだ。同農場の特徴は稲作・農産物加工(切り餅・移動式米粉クレープ屋)・道路除雪受託を3本柱としている。また、平成21年にはJGAP認証農場取得、離農者圃場の請負等地域を守り続ける為、安全弁となる活動をしている。水稻の栽培では品質・食味・収量を安定させるために水・土・人にこだわりをもっている。水の面では明渠の設置による圃場整備を実施、土づくりでは籾殻還元、肥料はネイグル新潟の指導によりホスピタ・ハイグリーンを使用して安定収量の確保を図っている。土づくりへのこだわりの結果、倒伏に強く高温・低温にも負けない稲体を作るまでに至り品質は「あまうま」の良食味米が生産出来ている。人の面では各作業に責任者を配置しスタッフに責任を与え責任感を育てるよう人材育成を行っている。例えば他の農業法人からの作業工程の例を聞いたところ、エリア毎に作業を全て任せているケースが多いようだが、当農場では1つの作業に対して1人のスタッフに権限を与え(作業内容に応じて副責任者を配置する場合もあり)、例え社長であってもその権限を持ったスタッフに従って作業に加わる組織体制を取っている。また、作業計画立案時には作業責任者は各スタッフの能力に応じて作業能力度ランクを決定し実働させる。作業終了後に週間ミーティングにて作業結果の報告を行い、作業の反省を行う。またスタッフ全員でその作業責任者に対するの評価を1~7段階で評価し作業に対する責任感を育てる工夫を行っている。



土地利用型の第一次産業は地域とのつながりは切っても切れない。地域を守り一生の仕事として未来につながっていくために経営を安定させることが重要である。

「体験発表 卸から直売へのシフト」 四国物産株式会社 課長 鎌倉主明氏

同社は大正7年に香川県にて創業、肥料・食品関連・ガソリンスタンドやガス等のエネルギー関連事業を行っている。肥料事業は小売店への卸販売を中心として活動していたが、小売店の高齢化や世代交代により販売量も減少、30年前は50軒程度の小売店があったが、現在では数件にまでになり直売強化へ方向転換せざるを得ない環境下となったことが農家への直売シフトのきっかけとなった。また、その他の直売強化の要因としては法人農家が増加し規模が大型化、法人農家は30~50代の農家が多くなっている事も起因している。全農集中購買銘柄の廉価品化成肥料の普及に伴い一般化成肥料では利益が取れないようになってきた昨今で

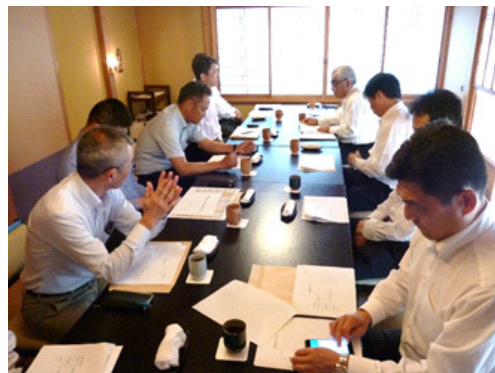


機能のある独自商品を販売する事に力を入れ始め、ハイグリーンも販売復活を図る事とした。ハイグリーンの販売対策としては化成肥料を中心とした慣行の施肥で生育不良の作柄が多い事に着目した。また、自社培土工場を活用し施肥種類の削減による省力化を提案材料として農家の要望に合わせて商品開発を行った。現在、ハイグリーンが入った配合肥料は5種類ある。また、アクションプランとして各営業担当が毎月計画を立てて行動(テーマの立案・具体的な行動計画・実現可能な販売量の設定・行動のレビュー)、メーカー担当者との同行販売や説明会を実施しこの3年で販売量が倍近くとなった。今後の課題として更なる大型農家への新規提案、販売農家の与信管理、商品の在庫・価格管理、新入社員の育成を考えている。営業担当者全員が農家に喜んで欲しいという思いで取り組んでいる。

メーカーからの提案として、原点に立ち返った「ハイグリーンの必要性和販売ターゲットのご提案」と題して中村技術普及グループ長より作物に対する微量要素の必要性、拡販に向けた提案の講演があった。今後の当会の益々の発展を祈念したい。

西部菱肥会役員会 in 滋賀

去る6月18～19日、滋賀県湖南市にて西部菱肥会役員会が開催された。出席者は、西部菱肥会理事・運営委員8社、賛助メーカー1社、事務局の当社スタッフを合わせて11名の参加となり盛況となった。西部菱肥会の行事としては、1月の新年賀詞交歓会に続き本年2回目となった。また、近年では滋賀県で開催していなかった事もあり一昨年会員となられた地元園田商事様様が幹事となり湖南市にある有限会社るシオールファーム様を訪問した。同社は園田商事様の取引先であり、社長の今井様が非農家出身ながらJA職員を経て25歳で就農、平成10年に近隣農家と共同ファームを設立された。栽培品目と面積は、小麦80ha・大豆110ha・水稲9ha。その他の事業として作業請負面積が大豆100ha、小麦120ha及び岐阜・愛知県等近隣県も含め大豆の病害虫防除作業(無人ヘリ)900haが主な経営の柱となっている。水稲の栽培品種は、コシヒカリ・みずかがみ・キヌヒカリ・きぬむすめ・日本晴・滋賀羽二重もち他多品種に及ぶ。野菜栽培も手掛けており、今井社長曰く滋賀県は茨城県と積算温度が類似して何でも栽培出来るはずなのだが主産地になりきれないと言う。



また、今井社長は機械好きで自社農場の耕作機械にも拘っている。ヨーロッパ製・日本製と使用して、日本製が優れていると思いきや日本製の方が結構壊れるとのこと。上述の通り、大面積をこなしているのも機械も酷使する。どうやら小さい面積の耕作の方が日本製は合っているのではないかと言われた。ヨーロッパ製もドイツ・イタリアと使ってみたが、見た目のカッコよさはイタリア製、しかし、作業性は断然ドイツ製だとか。産地国から生まれたメーカーはノウハウの蓄積がされやすいためなのかその主産地作物に適合した優れた製品を生み出す事が多いのではないかと感じているとの事。

るシオールファームは、直売所と併設のレストランを営業しており、年間1億2千万円の売上高がある。店舗運営に際し、どうしたらお客様に来て頂けるのかを思案したところ、女性客の集客の重要性(野菜等の農産物を購入するのは奥様方)に着目。女性が好む果物として「いちじく」を栽培、店舗販売で好評となり「米」の販売にも結び付いた。また、滋賀県でも最近食するようになった白ねぎを「忍ネギ」のブランド名を付けて付加価値販売をされている。玉葱は店頭販売と玉葱を加工した瓶詰めの玉葱ドレッシングを開発されている。一般の玉葱ドレッシングは、玉葱はなんと5%程度しか入っていないものが多いそうなのだが、るシオールファームの自家製は何と45%も原料として玉葱を使っている。当初は、玉葱55%で構想したが、瓶から出にくくてやむなく45%にした経緯があったそうだ。所謂六次化を実践されておられるが、農家が六次化を成功させるには相当の苦労があったとのこと。西部菱肥会としては久々の現地研修会となった。肥料を実際に使用して栽培、青果物を加工販売されている現場を見学・講習出来た事で今後の肥料販売のヒントが掴めた研修となった。その後、移動して室内にて情報交換会を実施。活発な意見交換がなされ有意義な役員会となりました。ご協力頂きました園田商事様高橋専務様始め社員の皆様へ感謝申し上げます。有り難うございました。(大阪支店)



秋雨前線の影響で九州地方などでは大雨になっているようです。特別警報などが発令されている場合には身の安全を第一に守る行動をお願い致します。

集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>